

水稲 イネドロオウムシについて



図1 イネドロオウムシによる被害（葉）



図2 イネドロオウムシ幼虫

1 生態

イネドロオウムシ（別名：イネクビホソハムシ）は甲虫の1種で、成虫の体長約5mm、頭部は藍色、胸部は黄褐色、翅は輝きのある藍色である。越冬世代成虫の生存期間は長く、7月中旬まで生存する個体もある。越冬世代の雌成虫は6月下旬頃まで産卵を行う。越冬世代の雌成虫はイネの葉に数粒ずつまとめて産みつける。1頭当たり生涯産卵数は200程度である。卵は長径約0.8mmの黄色であるが、孵化前になると表面が黄色から褐色に変化する。幼虫は洋なしに似た体型で老熟すると体長は約5mmとなる。幼虫は自分の糞を背負っていることから泥（どろ）背負（おい）虫（むし）と名付けられた。糞を背負っているのは直射日光を避けるため、体の乾燥を防ぐため、天敵からの攻撃を防ぐためと考えられている。蛹は黄白色で体長約4mm、白い繭の中で羽化する。第1世代成虫は7月上旬頃から発生し、8月には雑草に移動して、そのまま越冬する。

成虫及び幼虫ともにイネの葉を加害するが、茎やもみへの被害は確認されていない。成虫よりも幼虫の食害量が多い。幼虫は葉をところどころを削るように食害し、幅広い白いかすり状の傷を付ける。成虫は葉に縦に白線状の長い傷を付けるので、イネミズゾウムシの成虫の食害痕とよく似るが、被害の発生時期はイネミズゾウムシが4～6月なのに対し、本虫は6～7月と異なるので見分けることが可能である。また、若齢幼虫の食害痕も、フタオビコヤガやシロマダラコヤガ（別名：シマメイレイ）の若齢幼虫の食害痕と似ているので注意が必要である。

箱施葉の普及で被害は少なくなったが、被害が大きいときは、ほ場一面が真っ白に見えることがある。被害を受けた株は枯れることは少なく、新しい茎や葉が出てくるので、出穂期前には生育は回復したように見えるが、茎数及び穂数は減少しており、収量に影響する。

2 発生状況

本県では中東濃の高標高地帯及び飛騨で山沿い等の冷涼な場所で発生が確認される。本虫は年1回の発生では場付近の雑草の中などで成虫により越冬する。越冬世代成虫のほ場での発生は田植え後の5月中旬頃から見られる。暖冬の年は越冬世代成虫が早くから出現し、イネの生育初期から葉を食害するので被害が大きくなる。低温・降雨を好むため、5月下旬～6月に曇雨天が多い年は越冬世代成虫の寿命が長く、産卵数が多くなり、幼虫の死亡も少ないので多発するが、晴天が続く年は発生が少ない。また、窒素施用量が多く、葉色が濃いほ場は多発する。

なお、移動性は低く、分散することなく、ほ場ではスポット的に被害が発生する。

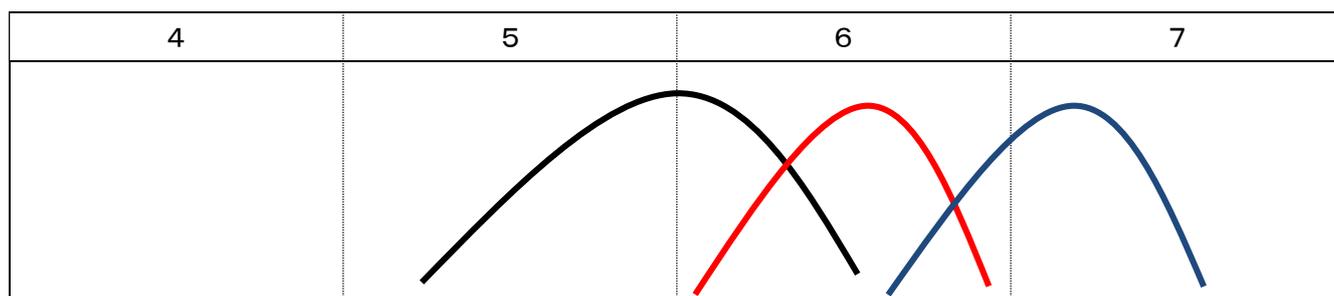


図2 イネドロオイムシの発生活消長

注 黒線：越冬世代成虫、赤線：第1世代幼虫、青線：第1世代成虫

3 防除対策

(1) 耕種的防除

移動性が低く、被害場所は限られるため、常発地帯及び前年発生したほ場では発生状況を確認する。ほ場周辺の雑草等で越冬や増殖するため、生息場所となる畦畔は雑草の除草を徹底する。

(2) 適正な肥培管理

葉色の濃いほ場で発生が多くなることから、窒素施用は適正に行う。

(3) 薬剤防除

箱施薬により防除を行う。なお、5月下旬から6月上旬にかけてほ場の被害面積率が3割以上確認された場合は登録のある薬剤を散布する。

本県では確認されていないが、他県では箱施薬による本虫の薬剤抵抗性が確認されているので、薬剤を散布する際は注意が必要である。